筑波大学教育学会第12回大会公開シンポジウム

2013年度の第12回大会では，二つのミニシンポジウムを開催した。具体的には，「アジア諸国との連携に基づく教育学研究の在り方」と「一貫制の理念に基づく授業研究の在り方」の二つである。以下，それぞれのシンポジウムの世話人より，シンポジウムの様子を報告する。

アジア諸国との連携に基づく教育学研究の在り方

Ⅰ．シンポジウム開催の趣旨

今日のグローバル化する社会状況のなかで，私たちは国境を越えて共通に取り組むことが求められるさまざまな課題に直面している。北東アジアにおいては，歴史認識，植民地支配にかかわる問題，とりわけヘイトスピーチにみられる偏狭なナショナリズムを克服するための多文化共生や国際理解など，教育学研究として取り組むことが求められている様々な課題がある。

本シンポジウムは，「アジア諸国との連携に基づく教育学研究の在り方」をテーマに開催された。シンポジストには，韓国から世明大学校の権 妍秀教授，中国から北京師範大学の姜 英敏副教授，筑波大学からは台湾との研究交流を続けておられる甲斐雄一郎教授に参加していただいた。司会は，手打明敏が務めた。

Ⅱ．報告内容

権 妍秀氏は，「韓国における国際共同研究の現状と東アジア共同研究に向けての提言」と題する報告をおこなった。韓国における国際共同研究は，英語による研究交流が盛んな理系中心に進んでおり，言語や文化の壁が障害となっている人文系の共同研究は非常に少ない現状にある。権氏は，東アジア圏での人文系の国際共同研究を推進していくためには，多様な学問領域の研究者と外国の言語と文学・文化を専門とする研究者が参加する研究者プールをつくり，それを利活用できる共同研究のシステムづくりが必要であると指摘した。

姜 英敏氏からは，「『「異己」との共生』を目指した教育実践を事例に」と題する報告がおこなわれた。「異己」とは，「コンフリクトをもつ相手」を指す言葉で

あり，価値観が異なり，政治的に対立あるいは敵対する立場にいる派閥，武装勢力，利益集団のことを指している。姜氏は，中・日の相互理解を図るための中・日共同授業を進めており，これまでの教育実践から「異己」との共生」中・日共同授業三段階として，①「異己」を認知する，②「異己性」に対する理解を試みる，③共同作業に挑み，共生プロセスを作っていく，を提示した。

甲斐雄一郎氏からは，台湾と日本の中学生の「論語」学習についての授業実践の比較研究から，北東アジアの国々で教科書の教材として採用されている「論語」学習を通じた国境を超えた読書共同体の可能性が提示された。

Ⅲ．協議内容

３名のシンポジストの報告から，アジア諸国の教育学研究者や教育実践者と国際共同研究をおこなう場合には，研究の前提として言語や文化背景の違いを理解することの必要性が提示された。こうした壁を超えていくためには，コトバの逐語訳による解釈ではなく，違いを生んでいる社会的文化的背景まで含んで理解することが必要である。そのためには教育学研究者のみならず，権氏から提示された関連する異分野の研究者が参加する共同研究チームが必要であろう。

教育学研究のテーマとして，こうした違いを理解した上で，ある事象に対して国，地域によって異なる反応，行動をとる背景を探っていくことにより，相互理解を深めていくという教育課題が設定できる。教科学習としてみれば，甲斐氏から報告のあった「論語」の現代的解釈の違いが生まれる文化背景の解明などの課題が設定できる。フロアからは，本シンポジウムを通じて，日本の世界史教育の不十分性，特に政治史，事件史に偏り，国や地域の違いによる価値観についての視点が欠けているとの指摘があった。

本シンポジウムを通じて，韓国，中国，日本の相互理解を図る為には東アジア圏の教育にかかわる国際的な共同研究ネットワークを構築する必要性が参加者に共有されたのではないかと思われる。

なお，本シンポジウムは，筑波大学人間総合科学研究科（人間系）と筑波大学教育学会の共催で開催された。

（文責：手打明敏・筑波大学）